JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY
2019年
No. 105
2019年12月15日（毎月15日）発行
日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION
〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2019 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第24回WAS国際会議報告１・２ …… 1
SEE主催『えんたく en México』報告 …… 11
思いこみのめがね㉑ …… 15
性教育の現場を訪ねて㉝ …… 16
多様な性のゆくえ㉜ …… 18
今月のブックガイド …… 19
JASEインフォメーション …… 20

◉第24回WAS（World Association for Sexual Health）国際会議報告・1

Building bridges in sexual health and rights
（性の健康と権利の橋渡し）

ルイ・パストゥール医学研究センター研究員　早乙女 智子

WASについて

WAS（World Association for Sexual Health：性の健康世界学会）は、隔年に開催されている性の健康に関する学際的な国際学会である。WASがない年は、AOFS（Asia Oceania Federation of Sexology：アジアオセアニア性科学会）の地域大会となる。

WASに参加し始めたのは、2009年、スウェーデンのイエテボリの大会で、演題が出せないときもあったが、それから毎年欠かさずWASかAOFSに参加している。

日本性科学会理事長の大川玲子先生からWASに行きましょうとお誘いを受けていたが、なかなか国際学会はハードルが高い。英語、休暇、費用、体力が揃わ

なければ行けない。しかし、一度行き始めると、同じようでいて毎年変化していく演題のトレンドと、海外の友人との交流の楽しさ、そしてその土地の食べ物や観光など、今の私にはもはや行かないという選択肢は

なくなっている。

1995年には松本清一会長のもとに横浜でWASが開催されたが、その時はまだこれほど深く自分が関わるとは思っていなかった。当時、Unmarried women and induced abortionという内容で発表しポスター賞を受賞した。国内開催はその後2000年にAOFSが神戸で、2012年にもAOFSが島根で開催されているが、WASは20年以上日本では開催されていない。

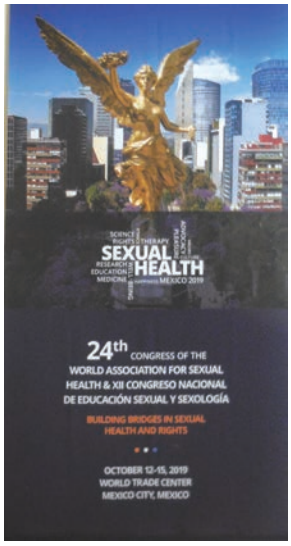
個人的には、ひょんなことから図々しくもチェコのプラハ大会の時にWASの理事選に出るという経験をし、選にはもれたが、何かお役に立ちたいという思いを汲んでいただき、昨年からWASの学術委員をさせていただいている。今年の大会では、演題の採択と振り分けのお手伝い、シンポジウムの企画を担当した。自分の抄録もまともに書けないのにと思いながら、冷や汗をかきつつ取り組んだ。抄録の約3分の1はスペイン語で書かれており往生したが、グーグル翻訳に助けられた。

学術委員の仕事は、プログラム作成までだと思っていたが、こともあろうに17題のWASレクチャーの1枠をいただくことになり、英語で30分のプレゼンをおこなうことになった。WASレクチャーに推薦いただいたAlain Giami学術委員長に感謝しつつ、それに値するレクチャーができるのか、まだようやく今年1月に京都大学菅沼信彦教授の下で人間健康科学博士をいただいたばかりの駆け出しの研究者としては冷や冷やする思いだった。

メキシコ大会概要

成田から直行便で12時間、メキシコシティーの空港から1時間弱で会場のメキシコシティーのワールドトレードセンターに着く。私たちはその周りにそれぞれホテルを取った。一人にホテル予約のトラブルがあったが、何とか宿を確保できた。街中はおおむね安全だが地下鉄は避けるように言われたので、移動は主にタクシーであった。物価は日本より少し安く、朝夕の車の渋滞を見ると、経済は回っているように思えた。道には段差が多かったが、日本とは異なり、どこでも必ず車椅子が通れるスロープがある。

今回の大会テーマは、Building bridges in sexual health and rights(性の健康と権利の橋渡し）である。



特に、今年発表されたGAB（Global Advisory Board）for Sexual Health and Wellbeingの新しい概念であるSexual health & rights & Pleasureのtriangleが今回のトピックスで、シンポジウムも盛り上がり、閉会式では、セクシュアルプレジャー宣言（仮訳）が発表された。つまり、これまでの「健康と権利」に「快楽」が加わった点が新しく、この概念は思春期も例外ではないことが重要である。性の快楽は身体的心理的満足や喜びであり、単なる性的経験や考え、妄想、夢、感情や感覚をさすのではない。日本語訳も追って発表されるだろう。

演題の内訳は、演題総数900、シンポジウム61、ワークショップ5、招待講演 11、WAS　レクチャー17、大会長スピーチ1、ジョンマネーレクチャー1、ゴールドメダル4、口演139（英語76、スペイン語・ポルトガル語63)、短報口演233（英語100、スペイン語・ポルトガル語113)、モデレートポスター口演76（英語40、スペイン語・ポルトガル語36）ポスター227（英語109、スペイン語・ポルトガル語118）ワークショップ5（英語2、スペイン語2、英語・スペイン語3）と、なかなかの盛況であった。

参加登録者は、1459人、74の国と地域から参加している。もちろん現地のメキシコが最も多く約半数の752人、USA157、ブラジル49、チリ41に次いで、日本からの参加者は33人と、日本は5番目に参加者が多い国だった。性科学に関心が高いとも言えるし、それだけの経済力があるとも言えるだろう。

日本からの演題は、Gold Medal 1題（大川)、WASレクチャー1題（早乙女)、シンポジウム4題（東、柳田、小貫、平山、Scowronski、Pacher)、口頭演題7題（山中、坂入、高瀬、Pacher、柳田、菅沼、石川)、短報演題8題（菰田、Kim、Pacher、イロタカ、小貫、Scowronski 、羽渕、平山)、モデレートポスター口頭2題（平山、Scowronski)、その他座長など、大いに貢献した。(順不同、敬称略)

大川玲子先生のゴールドメダル賞は、松本清一先

大川玲子先生のゴールドメダル受賞パーティー

生、波多野義郎先生、池上千寿子先生に次いで日本人では4人目の受賞となった。パワーポイントのトラブルで、せっかく用意されたストーリーがうまく流れなかったのは残念だったが、多くの聴衆が先生の臨床経験や社会活動、そして30年にわたるWASへの貢献を讃えた。

その前夜は、JASEとJFSの企画で日本からの参加者で会場近くのレストランで大川先生のお祝いのディナーとなった。大川先生は、現地でもらったお花をどうしようと悩んだ末に洗面台に置いておいたら、ベッドメイクの際にアイスペールに見事に活けてあったそうだ。

また、特別な表彰はなかったものの、JASEの性行動調査の発表をされた石川由香里先生の抄録（Expioring the Background of the Refusal of Sexual Experience by Japanese Youth）が、900演題の応募の中でベスト抄録の7題に入っていた。

全体的な印象は、とにかくメキシコ人の参加が多く、スペイン語セッションの多さ、質疑でのスペイン語が気になった。とはいえ、参加者が多く活気に満ち溢れ、陽気な会だった。

ベスト抄録に選ばれた石川由香里先生の発表

今回の大会長は、Osmar Juan Matsui Santanaさんで、日本語は話せない日系3世ということだったが、やはり親近感は隠せない。お人柄も素晴らしく、日系人が会長というご活躍をされているのも何だか嬉しかった。

会期は、10月12日から15日の4日間であった。場所はワールドトレードセンターで、土日は家族向けや子供向けのイベント、平日は企業イベントと毎日のように他のイベントと棲み分けながら、見事な采配の中でプログラムがこなされていく。

学会内容

今回は、記録ノートを用意して、前もってプログラムを書き込んでおき、講演を聞きながら空白を埋めることを目指していた。しかし、思いがけず自分の発表準備が進まないままメキシコ入りしたため、予定していた前半の演題の聴講のほとんどを断念することになり、学会内容の報告書を書くには、情報が著しく不足していることをあらかじめお断りしておく。

ゴールドメダル記念講演

ゴールドメダルは、WASの中で卓越した研究者に与えられる賞で、今回はMaria Perez-Conchillo（USA）、Reiko Ohkawa（日本）、Mireille Bonierbale（フランス、出席せず、Alain Giamiが代読）、そしてJ. Dennis Fortenberry（USA）の4名が受賞した。

大川玲子先生のご講演は、誰よりも診てきた膣痙Vaginismusの話や、診断基準の変遷、膣痙という疾患概念は、挿入障害・骨盤痛に代わって寂しいけれど仕方がないということ、そして最近取り組まれている千葉県の性犯罪被害者支援ワンストップセンターCISSAT（ちさと）の活動について話された。パワーポイントが勝手に先送りされてしまうなど、機器の作動がうまくいかないなかで、座長の東優子さんがうまくつないで間を持たせ、流石に場慣れしている素晴らしい座長ぶりであった。

私は、その他にはプログラムの最後に組まれていたIndiana大学のFortenberry先生のSexual Pleasures in Adolescenceを拝聴した。講演は、教育学の王道だったのだろうと思う理路整然としたものだったが、日本でこれを紹介したとして、どこまで響くの

座長のトンミ・パーラネン氏と筆者

だろうかとも思った。閉会式直前に誰もが聞きたい演題を持ってくるのは常套手段だが、多くの参加者がそのまま閉会式まで参加した。

WASレクチャー

招待講演のほかに、WAS内部からの講演枠が用意された。学術委員として推薦できるだけの情報量がなくなかなか提案できずにいたら、自分の応募演題をWASレクチャー枠に振り当てられることになった。WASレクチャーは、役員の中から選定された17人の演題で、いつも眺めていた人たちの中に自分が入っているのが信じられない不思議な感じだった。

やや無謀なこの提案に対して、30分英語で話せるか、内容も含めて不安の方が大きかったが、せっかくなので引き受けさせていただくことに決めた。提出していた抄録「How Clitoris researched historically：クリトリスはどのように研究されてきたか」をそのまま使用して、PUBMEDの論文リストから拾い出した結果を発表した。自分で始めたこととはいえ、PUBMEDで引き出したクリトリスの論文2324編を眺めるのは楽しくも膨大な作業を要した。

当初の目的は、診断機器の発達や時代の変遷とクリトリス研究の変化だったが、途中からこれは切除の歴史だと思うようになった。時間的制約もあり、形態や手術に関する文献を集めてその流れだけを追った。もちろん、解剖学的な知見や、生理学的研究の変遷も多々あり大変興味深いが、「クリトリス」というキーワードからは、少し違う景色が見えた。

クリトリスに関する最初の論文は、1801年Richard Simmonsが発表したCase of an extraordinary enlargement of the clitoris「非常に大きなクリトリス肥大の一例」であった。それからしばらくは肥大したクリトリスの切除、という論文が続く。大きさの表現には、enlarged（大きくなった）だけでなく、elephantiasis（象皮病）やhypertrophy（肥大）、clitoromegaly（クリトリス肥大）、ambiguous genitalia（あいまいな外性器）、testicular feminization（精巣性女性化）、engorgement（怒張）、virilization（男性化）などがある。

これらは、女性のサイズではない、とか、男性のような、という意味合いを含む。歴史的なことを想えば、今よりはるかに性別は二分されていたのだから批判するつもりはない。ただ、改めて現代で見ると、なかなか強烈な、言われたくない呼び名ではある。そして、肥大に対する縮小手術の次には性分化状態（DSD: Differences of Sex Development）に対する手術の歴史が始まる。私はそうした手術の経験はないので、もう少し文献調査で術式の変化を追う予定だが、このあたりもなかなか奥が深そうだ。術式名も、excision「切除」からplasty「形成」へと変化し、文化的な要素としての女性性器切除（FGM：Female Genital Mutilation）の論文が見え始める。FGMに関する最初の論文は1953年に書かれ、呼び方もCircumcision（割礼）からMutilation（切断）に変化する。こうして切除や形成が盛んにおこなわれるようになり、手術の技術は性別違和の性別適合手術（SRS：Sexual reassignment surgery）に繋がっていく。

クリトリスの包皮に関する論文は思ったより少なく２編しかなかったが、クリトリスの腫瘍は良性、悪性含めて74種類も報告されており、この内容だけで誰も買わない１冊の本ができそうだった。

また、ヘアータヌケット症候群といって、赤ちゃんの指などにも起こるのだが、髪の毛が駆血帯のように巻きついて血行障害を起こす状態がクリトリスに関して13編も報告されていた。アメーバやクレブシエラ菌などのクリトリスの感染症の報告もあり、気になっていたクリトリスの疾患を一望できたのは個人的には大きな収穫だったし、まだこの続きを調べていきたいと思う。

進行時間が押していたので、30分の予定が実質22分の発表となったが、終了後は、そのセッションの最後だったこともあり、参加者と写真を撮ったり、質疑に応じたりする楽しいひと時を過ごした。座長のトンミ・パーラネンも、男性の割礼問題に取り組んでお

大会会場の様子

り、男女で比較しないようにと指摘されたが、確かに問題の中身が違うのかもしれない。いずれにしても、第三者が性器にメスを入れることに関して、引き続き問題意識をもっていきたい。とにかく、現地入りしてもまだ発表準備が遥かに間に合っていなかったので、残念ながら聴講予定していたほとんどの演題を聞くことができなかったのは痛恨の極みであるが、多くの聴講者に温かく見守ってもらい、Congulaturations!（おめでとう）と声をかけてもらってようやく、とりあえず終わった、と安堵した。

シンポジウム

シンポジウムの一つは、日本から提案させて頂いた若者のセクシュアリティ国際比較である。日本で暮らす Scorownski 先生は日本人の性のあり方に大変興味を持たれ、平山真紀先生や Pacher さんと研究されていて、私も少し関わらせていただいている。まだパイロットスタディの段階だが、西洋とは明らかに異なる性行動パターンは、更なる要因分析が必要と思われた。いわゆる性行動が低調な日本では低出生率が問題視されているが、本学会のメインテーマに照らして考えれば、一人一人の性の快楽が担保されるかどうかと、それが出産行動につながるかどうかは一元的には考えられないのではないだろうか。日本での性の二次元化は、ある意味世界最先端のあるべき姿なのかもしれないとも思った。

また、フィンランドの SEXPO 財団が主体となって行っている男子の割礼問題のシンポジウムは、大変興味深いテーマである。今までは、男子の割礼は宗教的、あるいは民族・文化的なものだと理解されてきたが、21 世紀は個の時代、本人の同意なしに体にメスを入れることの是非はいかなる場合にも見直すべきときなのだろうと思う。実際、それでペニスに傷や痛みが残ったり機能障害を起こすなどの問題もあり、心の傷や性的な愉しみを奪われた男性もたくさんいるのだ。イギリスでは、割礼に反対する医師の会（DOC: Doctors opposed to Circumcision ）もあるという。

日本では慣習的には割礼はおこなわれていないが、包茎を気にする男性に思春期以降に自費診療で包皮切除を勧めるような宣伝もおこなわれている。また、日本特有のお作法に小さいころから「包皮を剥く」というのがあり、西洋の切るか切らないか、とは異なる第三の選択肢は科学的にどう考えるべきなのか、国内での議論を待ちたい。

開会式・閉会式

開会式は、なかなか始まらなかった。結果的には 1 時間遅れでようやく始まり、その日は一日中、1 時間押しとなった。Pedro Nobre WAS 会長の挨拶のあと、メキシコ政府秘書官の Dra.Olga Sanchez Cordero さんの演説があり、主にメキシコの参加者に熱狂的に迎えられていたが、しょっぱなからスペイン語で始まり、内容が理解できなかったのはもったいなかった。あとで翻訳機が借りられることを知った。その後どうなることかと思ったが、翌日からは、よくある入れ替えの遅れ程度で済んだ。

閉会式では、今回のトピックスである「セクシュアルプレジャー宣言」（仮）が発表された。1994 年のリプロダクティブヘルス＆ライツから 25 年、思春期の子どもも含めて性の快楽を享受するための情報や手段の提供がさらに求められる。

メキシコ大会に参加して

ディナー、食事など

一日早く現地に入ったので、夜はホテルのレストランでスープと伝統的なソースの肉料理をいただいた。スープは具がさらに盛ってあり、そこにスープを注ぐスタイルで美味しかった。

12 日は大川玲子先生のゴールドメダル受賞パーティーを日本人参加者でおこなった。シーフードのお店で、参加者がほぼ一堂に会して交流を深めた。

日本からの参加者たちと。
（中央が大川先生、その左隣が筆者）

13 日は会費制の congress dinner で、150 人くらいいただろうか、テキーラで盛り上がりながら、陽気なバンドが各テーブルを回り、それぞれのお国の歌を歌ってくれる。ハポネスのテーブルは「川の流れのように」だった。他のテーブルでは歌いだす人、踊りだす人など様々で、いつも一芸の大切さを思い出す。

14 日は、委員の一人として会長招宴に参加させてもらった。ドレスコードはフォーマルということだったので、スーツケースの半分を占めていた着物一式の出番である。写真撮影ではもてたが、いわゆる「モンテズマの呪い」と言われるお腹の不調で途中退席することになった。モンテズマは、征服された最期の王で、いまだに呪いがかけられているらしい。街自体が 2000m の高地であり、少し急いで歩くと息切れがする。ただ、それよりもわけのわからない具合の悪さを初めて経験したのは私だけではなく、いわゆる高山病なのかもしれないが、呪いに打ちのめされた感じも経験としては悪くない。

料理は、基本的にはタコス、ワカモーレ（アボカド）、肉は鶏、豚、牛、にシーフードと飽きることもなく、和食が食べたいとも思わなかった。国立民族博物館のレストランで食べたサラダに入っていたイナゴ？ だけは、頑張って 4 匹食べたがどうしても普通には食が進まなかった。

出かける直前になって、ホテルの予約が朝食付きのはずが、朝食は別料金でした、と連絡が入ったからかわからないが、発表準備や体調不良などで結局、美味しいと評判だったクラウンプラザホテルの朝食は食べず仕舞いだった。ランチは、毎日会場近くのタコス屋さんで食べた。初回は pescado（魚）、次は cochinita（ミンチ肉）、そして最後はチョリソー。魚もおいしかったが、結果的にはみんなが食べている cochinita が安くておいしかった。

観　光

発表が終わり、ようやく観光気分になれたが、とはいえ聞きたい演題もあり悩ましい。15 日朝のシンポジウム、一般演題を聞いた後、今後の研究についての相談をし、同じくようやく観光気分になった大川先生と、国立民俗博物館に行くことになった。柳田さんの発表に間に合わないなあ、と思いながら、どこか、しょうがないなあ、といういい加減さに自分でも呆れながら、タクシーで出かけた。海外からの観光客が日本語しか話せないタクシーに幻滅するのと同じ気持ちを味わいながら、それでも何とか意思疎通を図ろうとする。他の参加者も、日本語と英語 VS スペイン語で情報交換したという。何とかはなるがやはり心もとない。WAS の理事たちは、母国語と英語の他にもう一つくらいは喋れる人が結構いる。私はフランス語検定３級は持っているが、やはり次はスペイン語をもう少し学んでおこうと思った。

学会が終わって翌日は、観光三昧。太陽のピラミッドと天使の街プエブラ観光。現地の日本人３世のガイドさんが添乗し、市内のソカロ地区を回り、大聖堂、国立宮殿、子どものためにと始まったセロス図書館を見学した。その後、世界遺産のテオティワカン遺跡へ向かう。かなり急峻な太陽のピラミッドに登ると辺りが見渡せて、なるほどここに作ったのも頷けると思った。滅びてしまったアステカ文明とその後を支配したスペイン文化の融合を複雑な気持ちで味わった。プエブラの街は、さらにフランス文化の影響も受けており、メキシコの様々な側面を見ることができた。

観光の帰りは事故渋滞に巻き込まれてメキシコ最後の夜の美味しいディナーを諦めることになったが、車内ではみんなのお菓子を分け合ってしのぎ、結果的には空港には間に合った。さらに搭乗機がロシアの軍事演習のため飛行ルートの変更を余儀なくされるなど、最期まではらはらさせられた。

性の健康の歴史は、人類の繁栄や生殖の歴史でもある。これからも WAS や AOFS に参加して、自分自身を見つめ、また時代の変化を見守っていきたいと思う。 2021 年の WAS 国際会議は 9 月 15 日～ 18 日、南アフリカのケープタウンで開催される予定。

◉第24回WAS（World Association for Sexual Health）国際会議報告・2

World Association for Sexual Health（WAS）のこれまでと Gold Medal 受賞

日本性科学会理事長・国立病院機構千葉医療センター婦人科非常勤　大川 玲子

はじめに

2019年10月にメキシコシティで開催された第24回性の健康世界学会“24th WAS”において、筆者は他の3名の性科学者と共に Gold Medal を受賞するという栄誉を得た。この賞は1995年日本で開催された第12回世界性科学会“12th WAS”で創設され、以後2年毎に開催される大会で数名の受賞者を懸賞している。

必ずしも WAS 活動に限らないが、性科学の分野における貢献を讃えるものである。日本人では初回が松本清一氏、次いで波多野義郎氏、池上千寿子氏と続き、筆者は4番目の受賞者となった。

World Association for Sexual Health（WAS）のこれまで

WAS については本紙で様々な紹介記事があるので筆者が見てきたものを中心にお伝えする。発端は World Association of Medical Sexology として1974年パリで開催した、第1回国際会議である。1970年代といえば日本でも日本性教育協会（JASE）をはじめ、日本性科学会、日本性機能学会が設立され、セクシュアリティに関する学会活動や教育・啓発活動が活発になった年代である。これは国内外でリベラル運動が盛んになったことと無関係ではない。1978年のローマ大会で World Association for Sexology（WAS）として、医学ばかりでなく、心理、教育、社会学、政治学など学際的で守備範囲の広い組織となった。

世界のパイオニアが集まった WAS 活動のリーダーであり、象徴的な存在は John Money（1921～2006）である。彼の性分化異常についての研究や対応指針は、後に批判の対象ともなったが、性心理学およびジェンダー／ジェンダー・ロール概念の提案は、その後の性科学に大きな影響を与えている。現在 WAS 大会は毎回、彼の名前を冠したセッション“John Money Lecture”を設けてその遺産を継承している。筆者は晩年の Money に数回お目にかかったが、JASE が日本に招請した時に、大事に持ち歩いていた著書『性の署名』にサインをいただいた。その時、本の扉にある壮年期のご自身の写真を見て「毛髪がふさふさしている」といつぶやいたことを、懐かしく思い出す。

Money に学び、その偉業に繋がりつつも、鋭く批判し修正を行ったハワイ大学の Milton Diamond は、JASE を通じた来日回数も多く、講演を聞き影響を受けた日本人は少なくない。ハワイ大学で直接 Diamond に師事し現在活躍中の日本人には、池上千寿子氏、東優子氏などがある。彼が2015年に Gold Medal を受賞した時には、「弟子（池上氏のこと）が先に受賞して」などのジョークを混えた、しかし素晴らしい講義に参加者はスタンディングオベーションで答えた。

第12回世界性科学会“12th WAS”

日本は設立当初から日本性教育協会と日本性科学会の前身である日本セックスカウンセラー・セラピスト協会（JASCT）が WAS に参加しており、1995

“12th WAS”横浜大会で質問に立つ筆者

年、アジアで初めての国際性科学会“12th WAS”を、オープンして間もない横浜のパシフィコで開催することとなった。

筆者にとって、また多くの日本人性科学者にとって世界と繋がるきっかけとなったこの大会は、前出の松本清一氏を会長に、日本性教育協会、日本思春期学会、日本性機能学会、日本家族計画協会、JASCT と当時のセクシュアリティ研究／活動の総力をあげた開催であった。

この年 JASCT は学会組織となり名称を日本性科学会とした。この５団体はその後日本性科学連合（JFS）を結成、国内での性科学活動と同時に、WAS およびその下部団体と言えるアジア・オセアニア性科学連合（AOFS）の窓口的活動を続けることになった。JFS には後に日本性感染症学会、性の健康医学財団が加わったが、医学財団はその後退会したので現在は６団体である。

12thWAS 当時のリーダーたちの多くは鬼籍に入られたが、その中で当時の性教育協会事務局長の故・島崎継雄氏には、退職後も JFS、その後２回の AOFS 日本大会（2000 年第６回および 2012 年第 12 回）の事務局長として、長く縁の下を支えていただいた。

当時は AIDS の脅威が世界を席巻しており、12th WAS も大きく取り上げていた。また性的少数者に関する研究もすでに WAS では重要な分野であった。

学術発表のほかこの大会で画期的であったことは、諮問委員会（advisory committee）の選出に当たって、委員数の男女平等（一方が６割を越えない）というルールが決まったことである。その後ジェンダーのみでなく、「５大陸のすべてに委員がいる」というルールも加えられた。筆者の受賞した Gold Medal 受賞者もほぼこの原則に則って選出されるなど、「確かにそれは理想的だが、人材が不足……」などというどこかの国や学会とは違って、リベラルな提案がリベラルに討議される学会という状態は、この間堅持されている。これはまた女性委員が半数いることが、実現可能の要素と筆者は確信している。

横浜で開催した “12th WAS”。野末悦子氏、堀口雅子氏、故・長池博子氏の顔が見える

このアファーマティブ・アクションのおかげもあって、筆者は次の 1997 年スペインはバレンシア大会で advisory committee のメンバーとなり、以後毎回の WAS 大会に参加することになった。すなわち 1999 年の香港から２年ごとにフランス（パリ）、キューバ（ハバナ）、カナダ（モントリオール）、オーストラリヤ（シドニー）、スウェーデン（ヨーテボリ）、イギリス（グラスゴー）、ブラジル（ポートアレグレ）、シンガポール、チェコ（プラハ）、そして今回のメキシコシティである。advisory committee は 2009 年のヨーテボリ大会まで 12 年間を筆者が務め、その後現在まで、日本代表ということではないが、大阪府立大学教授の東優子氏が委員になっている。

公用語が英語とスペイン語の二つ、ということも WAS のユニークな点の一つであろう。100 カ国以上からの会員（正式メンバーは性の健康に関する団体）がある WAS の大きな勢力は、ヨーロッパ、南・北アメリカである。スペイン語圏の参加者が多く、彼らを大事にするためにスペイン語も公用語となっている。とはいえ日本を含む非英語・スペイン語国での学会では、自国語も含めた同時通訳も困難で、扱いは開催国に任されている。今回のメキシコ大会では発表の半数がスペイン語であり、日本人としてはマイノリティ感を強めることになった。

12th WAS 以後の WAS 活動

1999 年の香港大会で採択した性の権利宣言“Declaration of Sexual Rights”はその後 2014 年に現在のものに改定された。「性の権利」は基本的人権のひと

東優子氏の座長のもと、Gold Medal Lecture.

つであり、「1.平等と差別されない権利」、「3.自律性と身体保全に関する権利」、「5.あらゆる暴力や強制・強要から自由でいる権利」、「6.プライバシーの権利」、「7.楽しめて満足できかつ安全な性的経験をする可能性のある、性の健康を含む、望みうる最高の性の健康を享受する権利」など16項目にわたっている。なお、「性の権利宣言」(2014年改訂版）のすべての項目は、JASEのホームページ（https://www.jase.faje.or.jp/pub/world.html）に掲載されているので参照していただきたい。

2005年より人間の健康に焦点を当て、またWHOとの連携を図る意味でWorld Association for Sexual Healthと団体名を変更した。なおWASという略称は変更していない。ここで性の健康の定義は「セクシュアリティに関する、身体的、心理的、ならびに社会・文化的well-beingの進行中のプロセス」であり、実質的にWHOの健康の定義と矛盾しない。一方、Sex、Sexuality、Sexual Healthの定義をworking definitionとしてではあるが、WHOホームページにも掲載するなど、性の健康に関してはWHOの相談機関と認定されるようになった。

名称変更の現場にadvisory委員として関わった筆者や日本人の仲間たちにしてみると、Sexual Scienceという言葉の持つ普遍性を上回る言葉がSexual Healthであるとは思えなかった。しかし当時、米国をはじめ日本でも「性教育バッシング」の政治的圧力が高まり、セクシュアリティを前面に出した活動はしにくい状況があった。

この状況突破がWHOとの連携であった。考えてみればセクシュアリティは極めて人間的なものである以上、政治や世界の情勢、さらには様々な矛盾のあおりを受ける発展途上国の人々や難民、そして特に女性と子供の健康を考慮しなければならない。その意味では学術的ニュアンスを残したScienceより、Sexual Healthという新しい名称によってWASは「性の権利のための行動」も含んだ団体として舵をきったと言える。

「性の健康宣言“Millennium Declaration for Sexual Health”」は2008年に公表されたが、2005年のモントリオール大会でWASの名称変更と同時に提案されたため、モントリオール宣言とも呼ばれている。以下JASEでの日本語訳（項目のみ）を示す。どの項目も大事な課題であり、現実的には国の状況によって重要性は異なるが、すべての人々の健康を念頭に、また国連のSDGsとも連携すべく提案されている。

1. すべての人々の「性の権利」を認識し、促進し、保証し、保護する
2. ジェンダーの平等を促進させる
3. あらゆる形態の性暴力および性的虐待を排除する
4. セクシュアリティに関する包括的な情報や教育を広く提供する
5. 生殖に関する健康（リプロダクティブ・ヘルス）のプログラムの中心的課題は「性の健康」である、という認識を確立する
6. HIV／AIDSや他の性感染症（STI）の蔓延を阻止し、状況を改善する
7. 性に関する悩み、性機能不全、性障害の存在を認識し、それらに取り組み、治療する
8. 性の喜びは幸福(well-being)の一要素であるという認識を確立する

「性の健康」の理念を伝え、活動につなげるためWASは2010年に9月4日を「性の健康デー“World Sexual Health Day”」と定め、各国でイベントをするよう奨励している。日本でも9月4日直近の週末に東京、大阪などで刺激的なイベントを開催しており、JASEもこれを共催している。

筆者としては「性の健康宣言」の8項目はどれも重要だが、この宣言の画期的な点は「8.性の喜び(Sexual Pleasure)」を掲げたことにあると確信している。例えば性教育について「寝た子を起こす」などの抑制的意見に対して、科学的に検討された幅広い「包括的性教育」は性行動開始を早めない、などのエ

ビデンスがある。

しかし、実際に行われる教育内容の多くは、望まない妊娠や性感染を避ける「安全な性」であり、性暴力をしない・されない理念やスキル、少数者への差別をしない、など正当ではあるが、基本はセクシュアリティの悪い側面の回避教育である。性行為は本来楽しいものである、という肯定的大前提を打ち出すことで、より性教育は効果が高まるのではないだろうか。

今回のWAS大会では“sexual pleasure”を前面に出し、特に性教育の分野で力を入れようという画期的な提案がなされた。実行にはためらいや困難が生じることであろうが、WASが提唱することで、一歩でも半歩でもこれが実現すると期待される。

セクシュアリティ、セクシュアル・ヘルスに関わる研究や実践は、この分野の先進国と言われている国でも、かつては強い抵抗を受けたし、現在でも積極的推進者はむしろマイノリティである。だからこそ国際団体が前向きの発言をすることに意義があり、事実筆者も長くWAS提案の先見性、正当性に後押しされて来た。アジアは参加メンバーが少なく、この40年でまだ日本とシンガポールしか学会を開催していない。さらにアフリカでは、これまで開催されていない。しかし次回2021年の第25回大会は、南アフリカ（ケープタウン）の開催である。日本からは距離的にも最も遠い国の一つであるが、直接触れる体験は大事なので是非参加したいと考えている。

WAS Gold Medal

さて話は冒頭の、筆者が受けたGold Medalに戻る。これまでの受賞者には、WASの活動に功績のあった人、NGOや各国の性教育や性の健康に長年貢献してきた人、研究や実戦で性の健康を前進させた著名人など多士済々である。

日本の受賞者では、故・松本清一氏は日本産婦人科学会をリードする医学者であると同時に、長く日本性教育協会、日本家族計画協会など、多くの性の健康団体の長であり、性の健康の発展に欠くべからざる方である。波多野義郎氏は東京学芸大学学長という指導力、秀でた英語力とで、専門分野の活動で多忙なところ、日本での国際学会、JFSを常にリードし、WASの委員会活動では後継の筆者をいつも導いてくださった。池上千寿子氏はフェミニストのリーダーであるとともに、ぷれいす東京（NPO法人）を設立しHIV感染者や性的少数者に熱い支援を送り続けている活動者である。

Gold MedalとJASEからいただいた花束

今回の受賞者の一人、Maria Perez-Conchilloはスペインの性科学を代表する心理学者で、1997年のWAS大会会長である。当時駆け出しの性科学者としてこの大会に参加した筆者は、初めての女性学会長を仰ぎ見たことであった。またDennis Fortenberryは米国の思春期の性の健康を専門とする小児科医であり、今回WASが前面に出した、性教育におけるSexual PleasureがGold Medal Lectureのテーマであり、受賞者でありKey Speakerでもあった。

このような過去現在の人材の中で、筆者は一人「身に余る光栄」という内心気後れた気分であったが、この大会に参加した、初対面の方も含めた多くの日本の仲間が、現地で祝賀会を開催してくださった。これはもう「素直に嬉しい」としか言いようのないことで、ありがたく乾杯（私以外は皆さんアルコールで）や花束を頂戴したのである。

ホテルに戻っては受賞講演の仕上げもしなくてはならなかったが、いただいたメダルと花束の写真を撮ったのでお礼の意を込めて掲載させていただく。皆さん本当に祝福と応援、ありがとうございました。

◉ SEE（Sexuality Education&Empowerment）主催『えんたく en México』報告

性暴力を理解し、“対話”を通して関係性を開く

SEE（Sexuality Education & Empowerment）共同代表　野坂 祐子

はじめに～ WAS 参加者による交流企画～

2019 年 10 月 13 日～ 15 日にメキシコシティで行われた第 24 回世界性の健康学会（World Association for Sexual Health）にて、日本からの参加者を対象としたプログラムを実施した。SEE（東優子・野坂祐子・吉田博美）による本企画は、参加者同士の交流とネットワーキングを目指したものであり、日本性教育協会の協賛を得ておこなわれた。

WAS には日本の諸団体も登録しており、隔年、世界各国で開催される大会は、性にまつわる最新の研究や実践等の情報共有の機会になっている。日頃、なかなか会えない日本の実践家との貴重な交流の場でもあるが、研究の内容だけ聞いているか、飲み会での顔しか知らないか、どちらかではないだろうか。せっかく日本全国から幅広い領域から参加されているのだし、何といっても「性」に対するこだわりがある方々である。どんな思いで活動に取り組んでいるのかお聴きし、それを次世代につないでいきたい。そう考えて、今回、SEE の活動の中心である大阪からメキシコに舞台を移してイベントを開催した。

本企画『えんたく en México』は、「関係性を開く」をテーマとし、前半は、藤岡淳子氏（大阪大学大学院教授）による「性暴力の理解と対応の基本」のミニレクチャー、後半では「えんたく」というリフレクティング・トークの手法を用いた“対話”のワークショップをおこなった。性問題行動や性暴力は、「関係性の病」(藤岡氏）と呼ばれるように、非対等で閉鎖的な関係性のなかで起こる。安全・安心を基盤とする性の健康を考えるうえで、関係性は欠かせない要素である。支援や研究に携わる実践家にとっても、関係性を開く機会が必要なのではないか。

そんな願いを込めて声をかけたところ、学会初日のタイトなスケジュールの合間に、20 名近くの参加者にお集まりいただいた。本稿では、その概要を報告する。

「性暴力の理解と対応の基本」

法務省において刑務所等の矯正施設で約 20 年間勤めたのち、現在は大学で教鞭をとりながら社会内で性加害者と家族等への支援を行っている藤岡氏に「性暴力の理解と対応の基本」をご講義いただいた。

藤岡淳子氏の講義

まず、性暴力とは何か。性的欲求は、自然で健康的なもので、性の好みも十人十色である。性暴力は、①同意なし、②対等性なし、③被害者に自発性なし、という条件をもつ。性暴力は、言葉によるものや覗き、下着盗といった非接触型から、レイプや快楽殺人など身体暴力性の高いものまでプリズムになっている。どれも上述した３つの条件にあてはまるが、それぞれの

リスクは異なる。

性暴力は、「関係性の病」といえる。性の部分に着目されがちだが、性行動を通じた「暴力」としての側面に留意する必要がある。性暴力とは、当人に欲求充足をもたらすパターン化された行動であり、「俺はこんなにがんばっているのに…」といった不満と「どうして俺ばっかり」という認知が、自己中心的な暴力行動につながる。この「感情－認知―行動の連結」のパターンに介入する必要があり、性暴力行動の変化にターゲットを絞ったアセスメントとトリートメントをおこなう。

子どもの場合は、「自分は性犯罪者」という否定的な自己概念を固定化させないように「性問題行動」と呼び、本児に対しても「性問題行動を持つ子ども」という表現を用いる。

犯行プロセスの理解「４つの壁」

性暴力は、「相手をたまたま見つけて、思わず襲ってしまった」というものではなく、そこに至るプロセスがある。図１は Finkelhor（1984）の４段階モデル（直線モデル）を説明したものである。

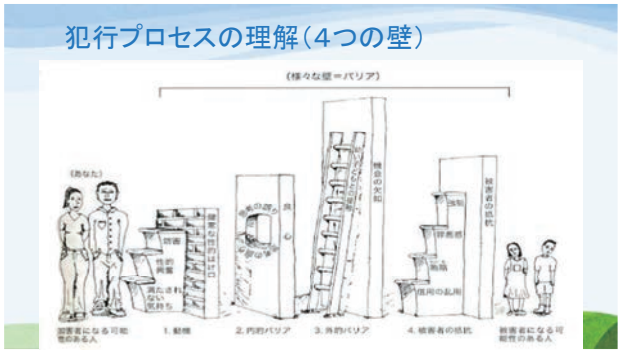


図１　『回復への道のり：パスウェイズ』
（カーン著、藤岡淳子訳，2009）より

①性加害行動の動機（OK ではない性的思考）
② OK ということにする（言い訳：内的バリアを超える）
③プランニング（被害者への近づき方を考える：外的バリアを超える）
④犯行（被害者の抵抗を抑圧する）
という４つの段階を踏んで性暴力は起こる。

人は満たされた生活を送っていればそれほど悪いことはしないが、頑張っても報われない、認められない、叱られてばかりといった状況があると動機の壁（①）を乗り越える一歩を進んでしまう。

気晴らしのマスターベーションの頻度が増え、頭の中は性的なことでいっぱいになる。そんなときに、またうまくいかないことがあると①を超えてしまう。「やってしまおうかな」と思っても、良心が内的バリア（②）になる。性犯罪者も良心はあるが、「盗撮がバレなければ相手も傷つかない」「相手も嫌がっていなかった」といった反社会的な考えや言い訳（思考の誤り）をしてしまう。それでも犯行の機会がなければできないが（③）、彼らはふだんから洗濯物やポストなどを物色しており、自分から機会をつくる。

最後は被害者の抵抗（④）が壁になるが、加害者の方がパワーが上なので、被害者の抵抗を容易に乗り越えてしまう。「新しいゲームがあるよ」などとわいろを渡したり、遊んであげたりする。

治療教育では、自分の犯行過程を思い出し、正直に話すのがポイントとなる。最初に「あなたが考えたことを知っているのはあなただけで、こちらはわからない」と説明する。性暴力は、医療にかかって服薬すれば治るようなものではなく、スポーツと同じように、本人が練習してスキルを身につけなければならず、支援者はそれをコーチするガイド役である。こうした関係作りが肝要である。

治療教育と同意のある関係性

治療教育では、４つの壁を高く、強くしていく。

まず、外的バリア（③）を高くして、再犯の機会を作らないように本人が自分でコントロールするとともに、家族とのコミュニケーションの質を高め、見守りによる双方の安心感を高める。次に、内的バリア（②）の思考の誤りを扱い、修正していく。思考の誤りには、被害者の同意を無視したり、「同意があった」という都合のよい解釈や誤解、ねつ造もある。

同意が成り立つには、次ページ図２に示すようなさまざまな条件が求められるが、加害者だけでなく、社会全体も同意の条件を理解できていないと思われることが少なくない。

治療教育で、被害者の壁（④）を高めるには、被害者の状況の理解が重要となる。被害者の反応や性暴力による影響について具体的に説明する。同意の理解と

同じように、社会でも被害者の状況が誤解されていると感じる。

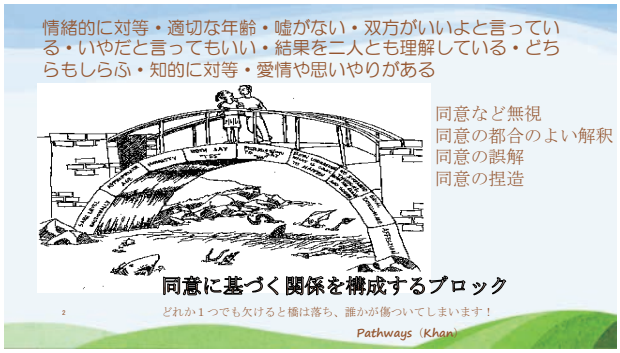


図２　『回復への道のり：パスウェイズ』
（カーン著、藤岡淳子訳，2009）より

そして、もっとも重要なのは動機のバリア（①）の強化である。まず、加害をした本人の境界線が守られ、安心・安全な生活環境をつくる必要がある。家庭のなかで彼らの境界線が守られていない。多くの場合、家族のコミュニケーションの量と質を高めることで、本人が正直に話せるようになっていく。

なぜ非行・犯罪をしたのかを理解し、変化（成長）への期待とのバランスをとる。そして、本人に必要なスキルの習得をサポートする。葛藤の体験とそれを乗り越える体験も大切である。

えんたく

なぜ、「えんたく」？

日本で開発された「えんたく」(アディクション円卓会議 ©ATA-net）は、ノルウェーのトム・アンデルセンの家族療法によるリフレクティング・トークから発展したもので、多様な声を響かせる工夫がなされた対話の手法である。

なぜ、“対話”が必要なのか。非行や犯罪をする人は、コミュニケーションが悪く、孤立し、断絶している。そこから回復するには、人とのつながりが不可欠である。できるだけ対等な関係のなかで、一人ひとりの声が響き合い、そこから自分の意見を作っていけるような対話が求められる。「えんたく」は、そんな場を作る試みであり、多くの声を響かせるために交通整理をするような方法である。

対話は開かれたものである。対等性のなかでお互いに応じ合いながら意味が生成され、変化していく。多声的（ポリフォニック）な対話になるにつれ、新たな理解が生じる可能性が広がる。全ての声が重要で、それらは等しく価値がある。モノローグにはどちらがいいとか正しいというヒエラルキーがあるが、対話はともに考える手段である。困難で行きづまった状況でこそ対話が必要とされる。結論を出すことを目指していないのが特徴であり、対話のなかから自分の考えを見つけてほしい。

内的会話（考える）と外的会話（表現する）

トム・アンデルセンのリフレクティング・トークのイメージ（図３）では、対話の片方が発したことが、本人の耳から入り、内的対話を深めていく。同時に、それが相手にも届き、相手のなかに入っていく。そして、双方が新たな意味を考えていく。リフレクティング・トークで相手の話を聴いている間、内的会話が活発になり、考えることに専念できる。内的会話と言葉で伝える外的会話を切り離すのである。

ふつうの会話では、相手の話を聞いているようでいながら、自分が次に話すことを考えているものだ。じっくり聴いて、しっかり応答することで、新たな意味が生まれ、協働で理解が深められていく。

図３ トム・アンデルセンによる「リフレクティング・トークイメージ」

「えんたく」の実際

後半の「えんたく」では、藤岡氏とともに一般社団法人もふもふネットで性暴力への取り組みをしている毛利真弓、坂東希の両氏が進行役を務め、”対話“が進められた。

「私が性への取り組みをするわけ」というテーマで、会場から６人が自発的に参加され、若い世代の３人と進行役、キャリアのある３人と進行役という、２つの「内円」が作られた。他の参加者は、内円を囲むか

たちの「外円」で話を聴く。内円の参加者は、進行役と会話するようにテーマについて語る。一人ずつ順に話したあと、もう一巡する。その後、もう一つの内円の参加者が、同じやり方で語る。２つの内円が二巡ずつ話し終えたら、「外円」の参加者が自由に発言する。最後に、全員で感想を共有する。

左から、進行役の坂東氏・藤岡氏・毛利氏

進行役は、リフレクティング（照らし返し）を行うため、発話者は、自分が言ったことを再度、自分で考えながら、「今、思うこと」を言葉にする。何を言ったらよいかわからない様子も見られたし、他者の話に影響を受けて話題が進展していく場面もあった。

数分ずつの順番（ターン）で話されるので、その方の人生や経験のほんの一端に触れられるだけだが、それぞれの家庭状況や時代背景、活動の原動力、未来に望むことなど、さまざまな語りを聴くことができた。聴いていた外円の参加者からも次々に「今、思うこと」が語られた。参加者同士、初めて会う人もいるなかで自分の思いや個人的な体験を共有するのは、なかなか難しいものである。「多くの声を響かせる工夫」という「えんたく」の技法による成果と言えよう。

「えんたく」実施風景

おわりに～"対話"をつなぐ～

「えんたく」の説明にもあったように、「えんたく」では結論が出されることがない。いわば「オチがない」状態に、大阪人ならずとも腑に落ちないところもあるかもしれない。でも、この「すぐに落ちない感じ」がよいのではないか……と個人的には感じられた。

性にまつわる現場では、「正しい情報」や「望ましいありかた」をいかに教えるべきか、「有害な情報」と「危険」をいかに回避させるかといった善悪の二項対立が前提になりやすい。もちろん正しい情報や危険の回避は重要であるが、「えんたく」では、だれもが性に対して悩み、傷つき、怒り、楽しみ、葛藤し、闘い、そして変化していく姿が語られた。性を生きる姿は、人それぞれで正解もない。この結論がない状態こそが性のリアリティであり、すぐに腑に落ちないくらいがちょうどよいのかもしれない。

他者の体験に耳を傾けると、自分の思いがけない記憶が呼び起こされる。とはいえ、話し手がどんどん変わるので、自分のことばかり考えてもいられない。これも、浅く広く安全に"対話"を進める工夫なのではないか。限られた時間であったにもかかわらず、たくさんの方の人生や思いに触れられた。ぜひ、この"対話"を今後につないでいけたらと思う。

ワークショップでは、参加者全員が「外円」から発言され、「内円」での対話にも挑戦いただいた。参加された皆さまに改めてお礼をお伝えするとともに、講師と進行役の方々にも感謝申し上げる。

SEE 性教育アカデミーは、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた 10 年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として開講されました。

SEE がモデルとするのは、ユネスコなど国連諸機関や国際学会が推奨する「包括的なセクシュアリティ教育」(CSE) です。学校や地域社会でこれから性教育をしていきたい、あるいは立場上しなければならなくなったという初学者はもちろんのこと、実践経験者にとっても CSE の基盤となる価値（人権・多様性尊重など）について学び直し、役立つプログラムを提供します。

次回のセミナーは、2020 年 3 月 8 日（日曜日）に「大阪府立大学 I-Site なんば」で開催される予定です。

思いこみの曲がね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義　Suzuki Shigeyoshi

公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。
専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

第21回
「1回目の退職」
地方への移住

平成14年4月、東京都の公立小学校の教員として採用された私。そして2年生の担任の先生になりました。初めて出会う子どもたちは、小さな瞳をキラキラさせながら私を見てきました。たくさんの先生や保護者の方に支えられながら、教員生活が始まりました。

給食初日のことは今でも忘れられません。当時は給食の牛乳が瓶でしたが、その日になんと3本の牛乳瓶が倒れました。床は真っ白、牛乳浸し。床に這いつくばって牛乳を雑巾で拭きながら、「俺は牛乳を拭くために教員になったのではない！」と思っていたことも思い出されます。

初任者として忙しい毎日を過ごしていましたが、当時のパートナーが支えてくれました。彼とのお付き合いは順調に続き、週末ごとのデートや旅行でリフレッシュしていました。劇団四季のミュージカルを、よく観に行きました。初めて観たのは「ライオンキング」、その後にハマったのは、「マンマミーア」。登場人物のセリフを暗記するくらい好きで、これがきっかけでアバの曲も聞くようになりました。

夏休みには仕事の合間をぬって、沖縄旅行にも出かけました。男2人の旅行です。周りの人にどう思われるのかな？　怪しまれないかな？　とドキドキする気持ちもありました。しかしその気持ちをかき消すくらい、沖縄の海と食を堪能しました。

彼のゲイ友達に会うこともありました。今までは出会いの掲示板を使って1対1で人と会うことはありましたが、大人数のゲイに会うのは初めてでした。1対1で人と会うのも緊張しましたが、右の人もゲイ、左の人もゲイ、どこを見てもゲイしかいない状況にも緊張しました。「あなたが○○君のパートナーなんだね。よろしく！」「シゲちゃんって呼んでいいかな？」そんな会話とお酒を楽しみながら、友達が増える楽しさを初めて味わったのもこの頃でした。大体みんな同年代、生まれも職業も全然違うけど、「ゲイ」という共通言語があれば仲良くなれる。同じ時代のテレビを観て大きくなり、同じ時代のアーティストの曲を聴いて大きくなった仲間です。「同じ釜の飯を食う」といった感覚がありました。あの頃は若かったなぁ。（笑）

当時の彼とのお付き合いを通して、実に世界が広がりました。結果的に数年後、彼とはお別れしました。が、あの時の経験や人間関係は、ゲイとして生きる自分の土台になっていることは間違いないと思います。

教員になって5年目の28歳、私は大きな決断をしました。それは地方に移住するということ。学生の頃から旅行で足繁く通っていたとある地方に、移住したいという気持ちを止められなくなっていました。実はそのとき、私は地方に住むパートナーと遠距離恋愛の真っ最中でした。移住するということは、もう一度その地方の教員採用試験に合格する必要があります。そして自分が勤務している小学校の校長先生に、そのことを伝える必要もありました。

ある日、意を決して校長室のドアを叩きました。「校長先生、相談したいことがあります。お時間をいただけないでしょうか」と切り出しました。思いの丈を伝えましたが、校長先生からのお返事はＮＯ！「シゲせんせーには、この学校でまだまだやって欲しいことがある！」と言われました。いったん引き下がった私は、再度考えました。そして数日後、再び校長室を訪れました。「校長先生、私が移住する地方には、結婚を前提にした彼女がいるのです！だから退職させてください！」と訴えました。驚いた校長先生は「それなら仕方がない」と退職を了承してくれました。

やはりここでも嘘をついてしまいました。「地方に同性のパートナーがいるので退職したい」とは決して言えませんでした。セクシュアルマイノリティであることが、自身のキャリアの形成にも大きく影響することを感じた瞬間でもありました。嘘をつかないと退職すらできない、何かをごまかさないと物事が前に進まない。信頼する人へのカミングアウトや自分の努力だけでは、解決できない課題がある。そんなことを初めて感じたのも、この頃だったかもしれません。

［奈良県奈良市立都南中学校］（上）

人権の視点から、担任が行う「多様な性の授業」

多くの寺社と歴史上重要な文化的資産を有する奈良市は、人口約 36 万人を擁する国際的な観光都市。奈良市立都南中学校では、人権教育の一環として「多様な性を考える授業」に取り組み、担任が行う道徳授業の枠で行っているという。今回は、奈良市立都南中学校の実践を紹介する。

盛りだくさんの人権課題を学習する理由

奈良市立都南中学校では、「人権教育」を教育の柱の１つとして、さまざまな人権課題についての学習をしているという。

「生徒たちは本校で、同和問題や障がい者、外国人、そして性的マイノリティにかかわる人権問題などいろいろな人権学習に取り組んで、３年間学習を積み上げていきます」。そう語るのは、都南中学校の人権教育部に所属している松田秀代教諭（国語）だ。

テーマは多岐にわたる。盛りだくさんの人権学習に取り組む理由について、松田教諭は、「義務教育で学校教育が終了する子どもたちがいます。社会に出れば、人権学習をする機会がなくなってしまうかもしれません。知らず知らずのうちに、差別する側、差別される側に立ってしまうおそれもあります。

そうならないためも、義務教育が終わる中学の３年間で多くの人権課題を学び、問題意識をもって社会にでてほしいと思うのです」と語ってくれた。

それぞれの学年がさまざまな個別課題に取り組むことになるけれど、まず１年生の最初の人権学習は、縁あって都南中学校に集まってきた生徒たちが、この学校をみんなにとって居心地のいい場所にするための理解学習からスタートしているのだという。

多様な性の授業に取り組むきっかけ

松田教諭が初めて性的マイノリティを取り巻く現状について知ったのは、今から数年前にさかのぼる。性的マイノリティ研究の第一人者である宝塚大学の日高庸晴教授の講演会に参加したことがきっかけだった。

奈良市立都南中学校
校長　宮廻なをみ
生徒数　451 名
教員数　35 名
（2019 年 4 月現在）

「それまでは、まったく考えたこともありませんでした。ところが、日高教授の講義を聞く中で、多くの苦しんでいる性的マイノリティの存在や、その苦しみの中で死を選ぶ人もいることを知って、そんなことがあるのか、とショックを受けました」。

当時はそれを授業につなげることは考えていなかったという松田教諭だが、性別違和をもつ生徒との出会いで考えが大きく変わっていったそうだ。

「戸籍上は女性ですが、１人だけズボンの制服を着て入学してきた生徒がいました。

日高先生の講演を聞いて LGBT についての知識はありましたが、実際問題どう接していいのか、正直わかりませんでした」

やがてその子とかかわるようになり、その子が３年生になって進路について話をしたときのこと。

「『どこの高校に行く？』と聞くと、『スカートの制服の高校にはいかない』という答えが返ってきました。何を学びたいかということよりも、ズボンで通える高校にしか行かないというのです。

本人や担任の先生と相談しながら家庭訪問を行い、そのことを親に伝えて、親も理解してくれました。また、性同一性障害・性別違和を診療するジェンダークリニックへの橋渡しもできました。けれども、もっと

「多様な性を考える授業」の授業案が欲しい方は、下記まで返信用の住所を記入したレターパックを同封の上、お申込みください。
〒530-0012
大阪市北区芝田1-13-16
宝塚大学看護学部日高庸晴
「授業案Ｊ係

「多様な性を考える授業」（抜粋）
一度の授業で子どもの人生が変わります

★多様な性を考える授業（１コマの展開案）

【ねらい】
・性の多様性について知り、肯定的にとらえる。
・自分や他者も「多様な性」を生きる一員であること、社会の一員であることに気づく。

【留意点】
・当事者がクラスにいるという前提で授業をする。
・話しやすい雰囲気づくりに配慮する。
・問題のある発言については、学習機会ととらえて、対応・展開する。

（宝塚大学看護学部日高庸晴教授と奈良県高等学校人権教育研究会が作成した「多様な性を考える授業」の手引書からの一部抜粋）

早いうちにその子と自身の性についての話ができていたら、その子ももっと違う中学生活が送れたかもしれないと思いました」と当時を振り返って話す。

多様な性の授業の実践まで

「LGBT についてもっと学びを深めたい」――松田教諭は宝塚大学の日高庸晴教授の研修会にたびたび参加するようになった。

「2014 年度から日高教授が厚生労働省のエイズ対策政策研究事業として奈良県高等学校の人権教育研究会の先生方とともに、多様な性を考えるための授業案、パワーポイントや配付資料などの教材開発、指導上の留意点をまとめる取り組みをされていました。そして、その取り組みに参加してはどうかと私にも声をかけてくださいました。私は中学校の教諭ですが、日高教授のもとで、奈良県高等学校人権教育研究会の先生方といっしょに多様な性の授業の指導案づくりに携わらせていただきました。できあがった授業案『多様な性を考える授業』を使って授業をするという機会があり、うちの学校で２年生と３年生を対象に授業をしてみたらどうだろうと思い、授業実施校に手を挙げました」（松田教諭）。

多様な性の授業の取り組みを教員たちに呼びかけ、上司の理解も得られて、授業の実施が決まった。

松田教諭は、授業の実施については担任のホームルームでの授業を提案した。

「生徒にとっていちばん身近で相談しやすいのが担任なのです。LGBT の子どもがクラスの中にいるかもしれないし、いないかもしれない。でも、自分たちに一番近い存在の担任が多様な性について、どのようなメッセージを発信するのかが重要なのです。だからこそ担任の先生方が自分の言葉で丁寧にすすめてもらうことが大事なのです」。

担任が授業することの意味は大きいと語る。

授業は道徳の時間を使って担任が行うことになった。

授業実施に向けて、まず行ったのが日高教授を招いて行う教員の研修会だったという。

「その日出席できない場合は、奈良県主催の研修会などほかにも研修会があるから、必ずいずれかの研修会に出席してほしいと先生方にお願いしました」。

結果的に教員のほぼ全員が研修を受けたという。日高教授を招いて行う研修も含め、授業実施までに行った研修は３回。先生の１人に協力してもらって、『多様な性を考える授業』にもとづいた１時間の模擬授業も実施した。

どのような授業だったのか。授業の実践については次回紹介する。

（取材・文　エム・シー・プレス　中出三重）

多様な性のゆくえ

One side／No side ［32］

宮田 一雄
みやた　かずお
ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

W杯効果が生み出す変化

ラグビーのワールドカップが閉幕してすでに１カ月以上が経過した。あの盛り上がりは何だったのか。

もちろん日本代表の大健闘はある。だが、それだけではない。背が高かったり、太っていたり、すばしこかったり、抜け目がなかったり……さまざまな特性を持つ15人の選手（あるいは先発15人を含む登録選手全員）が練習を重ね、試合ではそれぞれの特性を生かしつつ、協力して一つのボールを前に運んでいく。ただし、ボールを前に投げることはできない。

その禁欲と巧技、そして激しくぶつかる爆発力。ラグビーという球技の持つ多様で、包摂的な魅力（英語で言えば、ダイバーシティとインクルーシブネス）が、日本社会を覆う閉塞感に一陣の風を吹き送る。そんな魅力を感じさせてくれたのではないか。

50年来のラグビーファンである老人には、その魅力を共有できる人がにわかに増えたことが無性にうれしく、大会期間中は会う人ごとに「ね、ね、おもしろいでしょう」と念を押したい気分だった。

東京・神宮前のコミュニティスペース subaCO（スバコ）には、大会の開催期間に合わせてプライドハウス東京2019が開設されていた。巨大スポーツ大会の開催時に、LGBTと総称されることが多いセクシュアルマイノリティの人たちが安心して過ごせる居場所を確保し、同時に性の多様性をめぐる情報発信の基地にもなる施設である。

オープン前日（つまりW杯開幕前日）の9月19日にはお披露目のプレスイベントが開かれ、一般財団法人東京マラソン財団とプライドハウス東京、および日本ラグビーフットボール選手会とプライドハウス東京の間で締結した協定書が公開された。選手会の畠山健介会長とプライドハウス東京の松中権代表が署名した協定書には、その目的が次のように書かれている。

『日本のラグビー業界において、多様なセクシュアリティの選手・指導者・スポーツ大会運営者・関係者、ファンなどの参加者が、性別・性的指向・性自認・性表現に関して差別や偏見を受けることなく、自分らしくラグビーを楽しみ、ラグビーが持つ魅力を享受できるように、正しい知識や理解を広げるための普及啓発をするため、相互に連携・協力する体制を構築する』

プライドハウス東京は選手会の研修（勉強会）に協力するなど理解を広げる努力を重ねており、そうした交流の成果が協定書につながったようだ。

この日のイベントでも選手会の川村慎副会長（NECグリーンロケッツ）と稲橋良太選手（クボタスピアーズ）がトークセッションに参加し、「勉強会を受けるまでは意識して考えることもなく、無意識に人を傷つける言葉を使っていたフシもある」と語るなどセクシュアリティの多様性に関する自らの考え方や態度が変わっていったことを明らかにしている。

ラグビーは多様性や包摂性をその価値の中に内包する球技なのだが、日本のラグビー界はこれまでそうした価値にあまり関心を示さなかった面もある。トップクラスの選手の間でその認識を改める動きがでてきたという意味でも、W杯開催は極めて大きな波及効果をもたらしたようだ。

世界中からW杯観戦に集まったファンの中には、せっかく日本に来たのだから……と様々な親善試合を計画した人も少なくない。私が知っているだけでも、大学や高校レベルの国際交流試合や各国軍隊のラグビー大会（日本からは自衛隊が参加）などがあった。

W杯では日本対サモア戦の当日だった10月5日には、International Inclusive Challenge（IIC）という国際大会が埼玉県三郷市で開かれている。

新聞では『アジア初「ゲイラグビー」大会開催』と報じられ、世界のゲイラグビー選抜チーム、外国籍・日本国籍の選手による東京のクラブチーム、外国籍・中国籍の選手による北京のクラブチーム、東京と大阪の選手による選抜チームの計4チームが3試合を行った。大会前日には東京・秋葉原で主催団体のInternational Gay Rugby（IGR）と日本ラグビーフットボール協会がLGBTへの理解促進に取り組む覚書にも署名している。変化は着実に表れているというべきだろう。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

結婚不要社会

山田昌弘著
朝日新聞出版
定価 750 円＋税

独身でいるほうがましな社会！

私の身近に、二人の四十代男性がいる。一人は性格がやさしく、コミュニケーション能力に長けていて、もう一人は少し喋るのは苦手だけれど、なかなかの資産家。見た目もけっして悪くない二人だが、いまだ独身だ。聞くと、前者はすでに結婚することは考えておらず、「収入的に結婚はむずかしいんじゃないかなあ」とクールに構えている。後者は、毎週のようにお見合いパーティに出かけ、女性から声もかかるのに、決心がつかない。

結婚する条件が劣っているわけでもない彼らがどうして結婚していないのか、本書『結婚不要社会』はヒントをくれた。まず驚かされるのが、未婚率の高さ。それは現在、三十代前半の男性で 47.1％にものぼり、1975 年の 14.3% と比べると、社会構造が変わってしまったともいえる状況なのである（2015 年の調査）。「結婚圧力」などという言葉は、もはや前世紀の遺物だ。

なんでこのような構造変化が生じてしまったのか、本書は、結婚とは何か？　という本質的な問題に迫りつつ解説してくれる。著者は、これまでにも「パラサイト・シングル」「婚活」といった言葉は世に送り出してきた家族社会学者、山田昌弘氏。

いちばんの要因は、身もふたもないが、若い男性のお財布が貧しくなったという現実だ。日本社会に未婚化がはじまったのは、経済が高度成長から低成長となった 1975 年以降で、さらに、ここ 20 年くらいの間で非正規雇用が急増した結果、結婚相手として女性に求められる男性の数が減ってきてしまった。山田氏の分析によると、よく言われていた「女性の社会進出」が理由などではない。

かつてジェンダー心理学の小倉千加子氏も「結婚は財布と顔の交換」と看破していたが、実際、女性が婚姻に求める条件はずっと「収入の多い男性」のままで、社会の劇的な変化に比べて、人々の意識のほうは変わっていなかった。山田氏の議論の要諦は、そのずれのなかで未婚化が進み、少子化を問題化させたというものだ。

ところで、欧米でも構造的な変化は生じていて、結婚における経済と親密性はもはや分離し、「恋愛感情最優先社会」という状態になっている。婚外子の数が増えて、結婚という形にとらわれない「結婚不要社会」になっていると山田氏は指摘する。一方、日本社会は結婚が不要という方向にはまだいたっておらず、むしろ旧来の結婚を求める気持ちのまま、それが実現できない「結婚困難社会」になっている。そして、なぜ我々の結婚への意識が変わらないのかというと、離婚がしにくい制度的な効果のほか、日本社会の「世間体」を気にせずにはいられない保守的な心理、文化にその一因があるとしている。

「日本人は、まだ中流が標準だという意識が強くて、人並みの生活ができない、我が子にさせられないということだけはどうしても避けたいのです。だから近代的結婚に固執せざるを得ない」

このように山田氏は、経済的な側面を軸に未婚社会を考察しているわけだが、私が、自分の周りを見ていてさらに思うところは、ここ数十年の間にネット社会が進み、そこで平等意識が徹底された背景だ。誰もが幸せになれる、なるのが当然だ、という前提においては、少しでも条件の悪い相手と結婚するのは受け入れ難い。納得のできない相手と拙速に結婚するくらいなら、独身でいるほうがましだ、という意識から晩婚化が進み、結局、結婚に踏み出せない。恋愛が流行らないのも同じ理由からではないか。

端的にいって、誰もが身の程を知らない社会になったということである。　（作家　伏見憲明）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
メール（info_jase@faje.or.jp）でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

▶▶ 2020 年 2 月 24 日（月曜日・振替休日）13：00 ～ 16：30 ◀◀

東京HIV と性の教育セミナー2020 ／東京性教育研修セミナー2020

令和の若者たちの性事情　UPDATE ！

性の教育をする前にこれだけは知っておこう

令和の幕開けに「性教育の手引」（東京都）が改定され、性教育の門戸がひろがりました。待ちに待ったこのチャンス逃してなるものか！　とはいえ、性教育をする前に知っておきたいことがある。それは、イマドキの若者の性、本当はどうなっているのか、ということ。　そこで最新データと新たな動きをとおして若者のセクシュアリティに迫り、新たな性の教育を探ってみましょう。

プログラム１　若者の性事情　UPDATE　３つの視点から

❶ 2010 年代における若者の性
拡大する性差とそれが意味するもの ――「青少年の性行動全国調査」からの報告　林　雄亮（武蔵大学社会学部准教授）

❷ 性と健康
アッという間に HIV を越えた！
若者たちにひろがる梅毒――「ストップ梅毒」検査と治療の最前線から　今村顕史（がん・感染症センター都立駒込病院感染症科部長）

❸ 性と人権
同性婚訴訟始まる
同性パートナーシップと何がどう違うのか―― 同性婚訴訟東京原告の立場から　佐藤郁夫（ぷれいす東京）

プログラム２　クロストーク　ゲストとフロアのオープントーク　司会・池上千寿子（ぷれいす東京）

会　場　日本性教育協会セミナールーム（東京都文京区小石川 2-3-23　春日尚学ビル B １）

参加費・問合せ先等　主　催：認定 NPO 法人ぷれいす東京　協　賛：日本性教育協会（JASE）
参加費：1,000 円・定員 30 名　事前申込み：Webサイトのフォームよりお申し込みください。
https://business.form-mailer.jp/fms/9e76a96284989
対　象：教育現場で性教育、保健教育を実践している方、教職員、養護教諭、保健師、助産師など
問合せ先：「ぷれいす東京セミナー係」E メール：office@ptokyo.org　TEL03-3361-8964

▶▶ 2020 年 3 月 8 日（日曜日）12：30 ～ 16：45 ◀◀

SEE（Sexuality Education and Empowerment）対話型ワークショップ

こんなとき、どうする？ どうみる？
性にまつわるケアと支援者への影響

～トラウマインフォームドケアの観点から～

本セミナーでは、支援スキルを身につける「前」に必要なスキルとして、様々な性の問題をどう捉えるか？ 性的な発達段階をふまえつつ、遊びと暴力の違いを見極める視点をみなさんと共有します。さらに、性に関する支援を行うことに伴う自分自身や組織への影響を理解します。

支援対象者や支援者自身、そして組織へのトラウマの影響を理解するトラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care）の観点から、性にまつわるケアについて、実践的に学びます。

講　師　野坂祐子（大阪大学大学院准教授）　吉田博美（駒澤大学学生相談室常勤カウンセラー）東　優子（大阪府立大学教授）

会　場　大阪府立大学 I-Site なんば（大阪市浪速区敷津東 2-1-41）

主　催　SEE　共催：大阪府立大学女性学研究センター　協賛：日本性教育協会　後援：大阪府立大学教育福祉学研究センター

参加費・問合せ先等　参加費：4,000 円（資料代含む）　定員 40 名（先着順）
問合せ・申込み先：①氏名、②所属、③連絡先（メールアドレスおよび電話番号）を記入のうえ
SEE 事務局　kansaishy@gmail.com　にメールで申し込みください。

2020年
1/26(日)
13：00〜16：10

第２回ともに拓く会

ＬＧＢＴ医療環境改善セミナー

おもなプログラム

13:05　基調講演
「性同一性障害のホルモン療法　基礎理解と熊本における現状と課題」　講師：池田 稔（医療法人榮邦会 池田クリニック院長）

14:10　講演
「想いをつなぐ　人・生活を支える看護師の視点から」　講師：田村 凌（ともに拓く会　医療班メンバー）

15:10　当事者３名による体験談
講師：拓く会メンバー３名（1 名につき 10 分の発表）

15:40　講演
「当院における取り組み」　講師：平村英寿（医療法人明薫会 長嶺南クリニック）

15:50　全体の質疑応答　交流

会　場　国立病院機構熊本医療センター　２Ｆ研修センターホール（熊本市中央区二の丸 1-5）

参加費・問い合わせ先等

【参加費】1,000 円　事前申込み当日参加いずれも可　【定　員】180 名
【申込先】こくちーず（ＱＲコードもしくはＵＲＬより）https://ssl.kokucheese.com/s/event/entry/585564
【問い合わせ先】セミナー申込及び 問い合わせ専用メールアドレス　hirakukaiseminar@gmail.com
【主　催】ともに拓く LGBTQ ＋の会　【共　催】医療法人明薫会　【後　援】熊本県医師会・熊本市医師会

2020年
2/15（土）
9：30〜16：00

第20回九州ブロック性教育研究大会・第24回熊本県性教育研究大会

児童生徒が今の性の状況を賢明に生き抜く為に必要な性に関する情報と性教育

おもな内容

基調講演　10：00 ～ 10：50
「新学習指導要領を踏まえた性に関する指導の推進」　横嶋　剛（文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課健康教育調査官）

講　演・１　11：00 ～ 12：00
「より複雑化し、分極化する若者の性意識・性行動を理解する～「第８回青少年の性行動全国調査」から見えてくること～」
石川由香里（第８回青少年の性行動調査委員長・活水女子大学健康生活学部教授）

講　演・２　13：20 ～ 14：20
「現実に起きている SNS 等による児童生徒の性被害について考える～若者の性被害の現状と性被害防止の取り組みの実際～」
矢津田竜太（熊本県警察本部生活安全部少年課係長）

体験発表およびフロアとの質疑応答　14：30 ～ 16：00

会　場　国立大学法人熊本大学工学部百周年記念館（熊本市中央区黒髪２-39-1）

参加費・申込み先

【資料代】3,500 円（学生 1,000 円）【定員】200 名　【大会申込】下記の２種類からお選び下さい
（1）「こくちーず」URL：https://www.kokuchpro.com/event/082d5667aa6a69af546b2d024db79f06/
（2）メールによる申し込み ★件名に「2 月 15 日九ブロ参加申込」とお書きください。
①氏名（通称可）　②都道府県名　③「一般」または「学生・10 代」　④所属　⑤連絡先（メールアドレスまたは電話番号・※定員を越えた時のお断りの連絡先）【連絡先・問い合わせ先】kumaseikenivent@gmail.com
【主催】熊本県性教育研究会　【共催】全国性教育研究団体連絡協議会九州ブロック性教育研究協議会　【協賛】日本性教育協会（JASE）

「青少年の性行動／日中比較研究」報告書 2019

30 年ぶりに刊行できた本書が、経年調査の比較を含めて、両国の青少年の性意識・性行動の実態を把握できる唯一の報告書です。

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第 8 回青少年の性行動全国調査」委員会内日中比較小委員会
協力 / 日本青少年研究所・上海社会科学院社会科学研究所

1974 年に第 1 回が開始され、2017 年に第 8 回を迎えた「青少年の性行動全国調査」は本年 8 月に「若者の性」白書が刊行されました。40 年近く続けられたこの調査は、国内を始め国外でも類例は極めてまれで、貴重な調査データとして国際的にも認知されています。

今回の日本における調査に際して他国との比較研究を検討し、上海社会科学院社会科学研究所の協力のもと、中国の青少年の性行動に関してほぼ同一の質問用紙にて調査が実現しました。調査地点は、北京・上海・広州の 3 地域であり、調査期間は 2017 年 10 月から 2018 年 3 月までで、調査対象者は中学生・高校生・大学生合計約 5000 人です。

〈主な内容〉
- ●はじめに
- ●序章　調査の概要
- ●第 1 章　性行動
- ●第 2 章　性イメージの日中比較
- ●第 3 章　避妊行動の日中比較
- ●第 4 章　中国の若者の性行動とその動機
- ●第 5 章　性の情報源の日中比較
- ●おわりに
- ●付表・中国の青少年の基礎集計表

B5 判　102 ページ

頒価：1,000 円

A4 判　80 ページ

頒価：1,000 円

青少年の性行動

わが国の中学生・高校生・大学生に関する第 8 回調査報告

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第 8 回青少年の性行動全国調査」委員会

若者の性にかかわる行動、規範意識、情報源などが、この 6 年間でどのように変容したかがわかる。若者の性を理解するための必須の資料！

2017 年 6 月から同年 12 月にかけて実施した「第 8 回青少年の性行動全国調査」の単純集計をまとめ一次報告書として刊行。主要な結果「デート経験」「キス経験」「性交経験」などの解説と、全質問の中学生・高校生・大学生の男女別集計結果を掲載。

両書籍とも、JASE ホームページからお申し込みいただけます。

https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html

または、Email　info_jase@faje.or.jp、　TEL 03-6801-9307　FAX 03-5800-0478 までお申し込みください。

●本書に関するお問い合せにつきましては、下記までお願いいたします。

一般財団法人 日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
〒 112-0002 東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビル B 1
TEL 03-6801-9307　　FAX 03-5800-0478
Mail　info_jase@faje.or.jp　URL https://www.jase.faje.or.jp

JASE

「若者の性」白書

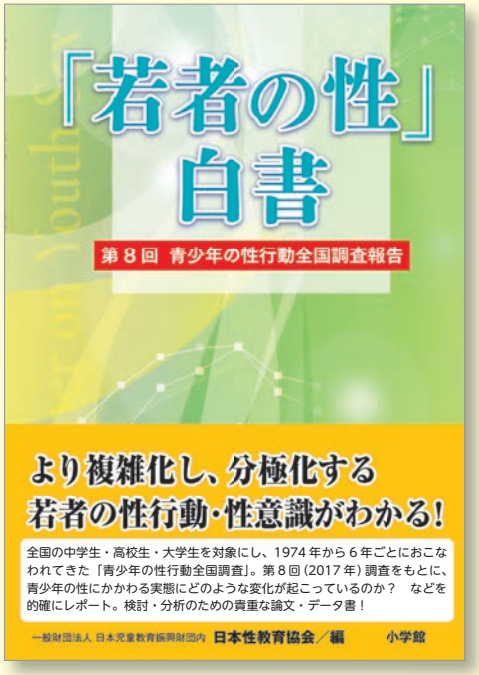
第８回　青少年の性行動全国調査報告

全国の中学生・高校生・大学生を対象にし、1974 年から６年ごとにおこなわれてきた「青少年の性行動全国調査」。第８回（2017 年）調査をもとに、青少年の性にかかわる実態にどのような変化が起こっているのか？　などを的確にレポート。検討・分析のための貴重な論文・データ書！

主な内容

序　章　第８回「青少年の性行動全国調査」の概要
第１章　変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
第２章　青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
第３章　家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
第４章　知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
第５章　青少年の性行動と所属集団の性行動規範
第６章　青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
第７章　性的被害と親密性からの／への逃避
第８章　青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～
付表Ⅰ　「青少年の性に関する調査」調査票
付表Ⅱ　基礎集計表（学校種別・男女別）

＊コラム
1…性情報について
2…性教育をめぐる近年の社会的動向
3…LGBT 学生について
4…男性の性的被害
5…「青少年の性行動全国調査」の困難と課題



好評発売中！

本体2,200円+税
Ａ5判 256ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会　　発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！